

## 寄書

三亭逸話

京の大佛

△奈良に於ける二週間、短しと雖も、余等には確かに益する所が、少なくなかつた。水彩畫に關しては、兩先生は勿論斯道のオーソリチーであるが、余の意見としては其キラクリターに於ても、優に僕輩の以て摸範とするにたる人だ

△一日大下師雨を春日社山門内に避けらる

師時に、洋傘を手にはせられず、某生其傘を用ひられん事を乞ふ傍にありし某生曰く『大下先生は兩と雨との隙間が、通れましよう』と

△講習會員の寫眞が出来た時に、名物男なる廿四貫君大下師に曰く『先生の隣りに居れば、相方の特徴がよく知れてコントラストが妙ですな』と

△三山亭なる會員の内拾人許りの有志をつのり、追々講習會も終りに近づいて來たから紀念の爲に、寫眞を撮影せむとす。

最後の批評會の當日に及び某寫眞師に至りて、位置及び背景はなるだけ奇抜にせんとす。寫眞師怒りて許諾を経ずして、撮影し終れり。皆大いに不平を鳴らしたり。出來上つて見れば、一つとして膨れ面ならざるはなかりき。啞然たり

△一日某生淺茅ヶ原にて、傘杖を立てて寫生中俄然沛然として降る雨に大雷をともしふ。某生大いに狼狽して、用具をかゝへて傘杖のみは、頭に金屬附しあればとて、原の眞中に捨て、歸

る。三亭の門を入るやガラ／＼と附近に落雷す。某生濡鼠の如くになりて傘杖を取りに行くに恐々たり。

△某肥大漢講習會閉會の翌日歸國せんとて停車場に至り見れば、發車に僅か二分を余すのみ、某生さらでだに持て余したる大軀に加ふるに、一の大いなるかばん三脚寫生箱プラツトホイムに出て々見れば南無三汽車は向ふ側に居つて今や發せんとして居る是非陸橋を渡らねばならぬこゝに於て大いに狼狽して橋を下れば驛夫は戸を開いて持つて居てくれた。腰を下す間もなくヒューの一聲と共に發車した、實に間髪をいれぬ位だつた。

片々

草水生

○小春日和の日曜日、冬の森でもかいて見やうと、のそのそ郊外に出かけた、暫して立ち止つたのは（三脚を据えたと云ひたいが）とある麥畑の畔青々した幾條のうれをへだてて枯れた穀斗林が柔い日影を浴びて紫に見える、僕はかがんだけれども、ペンを探るの勇氣を出しかれた、宛然嬰兒の母親に抱かれた時のやう、偉大なる冬の美にうたれて！

○あゝ淋しい哉冬の林や、細々たる綺羅の衣を惜しげもなく擲げ捨て、吐く呼吸の氣もない禪定の姿、裸體の森の女神が落葉厚き山懷に倚りかかつて眠つてゐるかのやう、其の幹、其の枝、凜たる威嚴、あゝ眞の影、何者かが私語いてゐる死の冬の美！！